

近代日本身装電子年表の構築

—身装画像データベースへのひとつの入り口として—

高橋晴子

中川 隆

大阪樟蔭女子大学

国立民族学博物館

web上で公開予定の近代日本の身装（身体と装い）画像データベースへの、ひとつの入り口として開発した身装電子年表のプロトタイプについて述べる。まず、一般の総合年表における身装に関する記述の不都合な点を指摘し、その解決策として、本電子年表では、つぎの3つの欄—A欄<事件>、B欄<現況>、C欄<回顧>を設定することを提案している。1894年（明治27年）を抄出することによって、それぞれの欄でとりあげる事項の相違を明らかにした。つぎに、システム構成について述べている。さらに電子年表の1894年の画面から、身装画像データベースを含む3つのリンク先の画面例を提示した。この身装電子年表は、身装画像データベースの検索ツールとしてだけでなく、独自の電子年表としてもweb上に公開予定である。

Construction of Modern Japan Costume Digital Chronology

-As one entrance to the costume image database-

Haruko Takahashi

Takashi Nakagawa

Osaka Shoin Women's College

National Museum of Ethnology

The prototype of costume digital chronology developed as one entrance to the costume image database of modern Japan is described. First, the inconvenient point of the description about the costume in general comprehensive chronology is pointed out. As the solution, setting up the following three column-<affair>, <present condition>, and <retrospection> is proposed in this digital chronology. Next, the system configuration is described. Furthermore, a few examples of a screen including the costume image database linked from the screen in 1894 of digital chronology was shown. In addition, this digital chronology aims at opening to the public also as original digital chronology not only as a search tool by the year of the costume image database which is planning public presentation on Web.

1. 緒言

ここ数年来、私は近代日本の身装（身体とよそおい）画像データベースを手がけてきた¹⁾²⁾。このデータベースは、画像にあらわれた身装の態様を明らかにし、わが国の近代化にともなう文化変容のひとつの様相を示すことを目的としている。「身装」とは、身体および身体を装うための「モノ」とそれに関連する「コトガラ」、そしてそれをささえる情景のすべてを含み、その全体をひとつの風俗現象としてとらえている概念である。

今回、このデータベースへのひとつの入り口として、近代日本身装電子年表³⁾⁴⁾のプロトタイプを作成した。本年表は、身装画像データベースへのアクセスの一方法として、時系列からの検索機能を担っている。

身装画像の諸主題についての、個々のモノとコトガラの時系列的把握があることによって、そのこと自体に対して理解が深まるだけでなく、関連主題の相関的な様相がより明らかになると考えられる。もちろん、

身装電子年表が完成すれば、身装画像データベースの検索ツールという役目だけではなく、それ自体が年表データベース、あるいは年表デジタルアーカイブとしての独立した実用機能をもつことも可能である。

さて、実用に耐えうる年表作成のためには、当然のことながら、対象となる領域・期間についての大量の文字と画像データを必要とする。われわれに年表作成の可能性を思いつかせたのは、ひとつには大阪樟蔭女子大学旧衣料情報室の4半世紀にわたる活動の過程と、国立民族学博物館MCD(民博コスチュームデータベース)プロジェクトによって蓄積されたデータの存在だった。なお、これらのデータの一部は、すでに国立民族学博物館のホームページから、<服装・身装文化データベース>として5本のデータ群⁵⁾が公開されている。

今日までのデータの収集・分析、そして二次資料⁶⁾とデータベースの作成、および旧衣料情報室を中心とした情報提供サービスの実務経験は、同時にこの年表の性格、目的も規定している。すなわち、この年表の作成目的は、‘ある時期、これこれのひとつとは、どのような身装によって生きていたか’という、具体的イメージを提供することに集約される。ふつう、年表における風俗・文化に関連する記述からは、その時々⁷⁾の出来事や流行のいくつかの例は理解できても、ある文化の基盤となる日常生活の、一般的な様相を把握するのはむずかしい。加えてその把握は、これが当時の人々の服装だ、ではなく、これもそうだしあれもそう⁸⁾だ、というかたちが一般的なすがたなのである。

本稿では、このような作成意図をもつ身装電子年表の構成、内容、およびシステム等の紹介を目的としている。なお、この電子年表は、身装画像データベースとともにweb上に公開予定である。

2. 年表記述における問題点

身装情報に対する社会的需要のうちのもっとも大きな比率は、モノやコトガラ⁹⁾の起源であるとか、制度の発足であるという一過的事件よりも、ひとつの主題の、ある期間における、状況的・持続的なすがた・ありかたについてである。正確な内容が求められ、それにもかかわらず十分な満足を与えることのむずかしいテーマは、(1)ある時代—環境条件(TPO)のもとでの、特定のpersonalityの具体的な、しかもある幅をもったスタイル、および、(2) 特定のスタイルについての、その時代の人びとの認識内容・評価である。

このように身装をふくめた風俗現象の本質からいえば、暦年枠を用いての年表構成は、この分野にはほんらい適当ではない。本年表の記述も、3章で説明するA、B欄では特定の時点における身装の実態を提示するという構成をとってはいるが、しかしそれは“記録”が暦年枠のなかにあるまでであって、“身装の実態”が暦年枠に閉じこめられていることではない。

このような、状況的・持続的内容を重視しなければならない身装関連事項の多くは、暦年・暦月表記法をとる一般的な総合年表のなかでは、〈風俗〉もしくは〈流行〉という概念のもとに、ややべつの扱いとなっている。たとえば『近代日本総合年表』(岩波書店 1968年)では、風俗事項に関する多くのものが、各年の社会欄の最後に、‘この年’という見出しのもとにまとめられている。

しかし、別扱いはされているものの、<事件>、事件の背景となる<現況>、<回顧>のそれぞれに属すると考えられるモノとコトガラが区別されることなく交錯して扱われているために、つぎのような不都合が生じている。

総合年表にほぼ共通する不都合の第1点は、数年、10数年の幅をもつことがふつうの流行・風俗現象が、特定の年と結びつきすぎてしまうことである。暦年の枠付けである年表中で、仮に‘この頃云々’といった事項を設けたとしても、その記述枠の年との結びつきが、見るひとに印象づけられることは避けられない。特定のある1年のなかで生まれ、消え去った現象であるなら、それはそれでよいのであるが。

不都合の第2点は、風俗現象の本質ともいえる、生起と消滅のあいまいさを示すための配慮に欠けることである。

不都合の第3点は、ひとつの現実の身装の基底である‘狭義の風俗’的事実が、ほとんど視野に入られていないことである。ある程度以上の時間的広がり¹⁰⁾のなかで定着した現象は、<流行>とは区別して、‘狭義の<風俗>’というよび方をする。‘狭義の<風俗>’とは、たとえば、1960年代に流行したブルー・ジーンズがよい例である。若者のカジュアル・ウェアとしてのそれ以後の絶対的優位から“風俗化”したという言い方がなされた。この時間的広がり¹¹⁾の記述への配慮が必要である。政治的推移が骨格である総合年表の場合においても、支配者や政権名等が、年月枠を超えた方法で図示されることがふつうである。近代日本の身装であると、ある期間、たとえば人びとが一般にはキモノを着ていたという、安定した状況的事実を、年月枠を超えて示す必要がある。

本身装電子年表では、以上のような不都合を避けるために、＜事件＞、＜現況＞、＜回顧＞を区分して記述する。それぞれの区分の内容例については、3章に掲載した本年表の一部の抄出を参照されたい。もちろん、この区別によって、不都合さが100パーセント避けられるわけではないが、必要に応じて、より具体的な情報をもつテキスト画面、あるいは関連画像画面を提供することによって、この不都合さはかなり解消されるのではないかと考える。

3. 身装電子年表の構成

この年表は、A欄〔事件〕、B欄〔現況〕、C欄〔回顧〕の3部から構成されている。

3つの欄は、それぞれを独立した年表と見ることもでき、それぞれの目的のために単一で利用することも可能である。

A欄〔事件〕はもっとも普通の意味での年表であり、特定のある時日に起こった事件を、正確な時系列で記録している。身装の推移と変化のありさまを歴史的に、また鳥瞰的に読みとろうとする目的に適している。

B欄〔現況〕は、その記録の時点における、身装の実態を具体的に知るための手がかりを提供している。手がかりとなる情報は文字記録と画像であるが、文字記録については新聞・雑誌記事による同時日(同時代)情報に限定し、画像についてもその理想に近づける努力をしている。B欄の基本理念はつぎの通りである。

①その時代に生きる人々の、具体的イメージを提供する。

1) 人の外見における、全体的、誘目的なアイテム(全身的服装・主要な衣服・トップ)に関して、その普遍性(一般化)の実情を示す、信頼度の高い文字・画像データを取りあげる。

2) 1)以外のアイテムについては、とくに強調されている、普遍性の状況を示すデータを取りあげる。

②その時代の身装に関連をもつ、基底的、かつ総合的な情報を提供する。

C欄〔回顧〕は、正確な時系列の枠(暦年枠)には入れにくい文字情報を、主題別に、おおまかな時代順で提示している。ほんらいはA、B欄におかれるべき内容の情報であっても、対象となる年から何年かを経過した時点での回顧である場合には、一般論として、事柄の内容、日時のどちらについても信憑性が落ちるとみななければならない。したがってそれらを同時日情報と区別して記述する。内容・年月にあいまいさがあっても、使い方さえ誤らなければ貴重な情報はすくなくないだろうという判断がC欄を設けた理由である。

回顧情報をA、B欄とは分離した理由は他にもある。回顧の多くは、報告者自身にも年月の厳密な特定がしにくいものである。何年頃とか、明治の末とか、戦時中は…というような記憶のなかにあるものを、機械的に数値化し、A、B欄と同じ枠の中に入れることは誤りといわなければならない。C欄の情報については回顧者の記憶のされかたにしたがって、ごくおおまかな時代順にならべたのは、それ以外に方法がなく、またそれで十分であるとも考えたためである。

さきに述べたC欄の主題は、さしあたり下記の65主題である。なお、65主題の設定については、①すでに公開している＜服装・身装文化データベース＞から、同時代文献、および現在の研究成果を対象としたシソーラスにあたる身装概念コードの索引頻度、②1910～1920年代の新聞流行記事中的の見出しと小見出しに出てくる語彙、を参考とし、さらに、実際に出現した回顧に関するデータ約12,000件から、ごくわずかな頻度を示す主題を除外した。これらの主題のなかでの事柄の記述の順序はおおまかであり、厳密な年代の前後関係は設定されないために、当然暦年枠はない。

なお、これらの主題は、身装概念コード(例：流行論はAP014)をもっており、このコードによって、身装画像データベース、およびすでに公開されている＜服装・身装文化データベース＞中のデータ群へのリンクが可能となっている。ここでは、コードを省略して主題のみ記す。

「流行論」「洋装化、西欧観」「モダンガール、モダンボーイ」「改良服、衣服改良」「地域差、地方の民俗」「流行(予測・現況・総括)」「美人観」「標準化、標準服、国民服」「生活理念、社会規範」「体型、体格」「姿勢、動作」「生活環境、衛生・健康観」「入浴、身体の清潔・洗浄」「身体露出、薄物、裸体」「性習慣、性差、異性装」「着こなし、着方、曳き裾」「生活水準、諸物価」「身分観念、階級」「レベネーション関連」「品質、品質管理」「手芸、編み物、ホームイング」「裁縫、衣服製作の技術」「衣服の手入れ・整理、洗濯」「リフォーム、更生服」「古着、古着屋、貸衣装、質屋」「小売、呉服屋、百貨店」「素材、染・織、刺繍等加工」「ニット、メヤス、レース等」「男女服仕立業(和洋)」「子供服」「アンダウェア」「洋装、洋服の服種」「職業による身装一般」「職業婦人」「芸者」「娼婦、花魁」「学生」「女学生」「TP0に

よる身装一般」「フォーマウェア、礼装」「婚礼」「女性の和装全般」「女性和装コート、外被類」「帯、その付属品(男女)」「和装下着、小物類(男女)」「和装短着(男女)」「男性の和装全般」「男性和装コート、外套一般」「和服の構造、綿入れ・あげなど」「宝飾品全般、装飾品類」「頸・肩覆い、ショール、マフラーなど」「かぶりもの、帽子、頭巾」「もちもの」「履きもの、靴、足袋、着脱」「頭髪、髪型、毛髪一般」「断髪、散切り」「日本髪」「束髪」「洋髪」「パーネット・ウェーブ」「化粧、香水、美顔術、刺青、美容整形」「理容・美容業、髪結い」「銀座、丸ビル」「街路、路面交通、街の賑わい」「照明」

つぎに明治27年（1894年）を例として、A欄、B欄、C欄を示す。

注）頭の、例えば・1/ は、1894年の1月を示している。さらに、頭に*のあるものは原テキストが参照できる。

1894(明治27) 年

A 欄<事件>

- ・1/ 京都の織物業者川島甚兵衛、ロシア皇太子より〈御用達〉の称号を許され、今後同殿下の徽章を、店舗等に掲示する権利を与えられる。〔読売 1/29(2)〕
- ・3/ 両陛下の銀婚祝賀の豊明殿の夜会に、天皇が皇后の手を取って出御したのが話題になる。〔日日 3/13(3)〕
- ・3/ 郵便配達夫(通送人)に、武器を携帯させるかどうかの論議あり。〔日日 3/16(3)〕
- ・4/ 11 日、ティファニー社パリ支店長スポールディング、天皇への献納品を携えて来日、日米間の宝飾品取引に関して我が国の業界関係者と懇談する。〔日日 4/11(x)〕
- ・10/ 福岡県の72才の老翁が、出征兵士用にと草鞋を作って献納した。〔読売 10/25(3)〕; 会計検査官松岡氏の実父80才は、みずからは戦場に赴けないからと、防寒草鞋200足を作って献納した。〔読売 12/25(3)〕
- ・12/ 旅順の劇場経営者唐某、日本人向けに上等浴場を開業したところ、毎日非常の繁盛とのこと。〔読売 12/21(3)〕
- ・12/ 東京湯島の高橋某、堅牢で、氷の上でも滑らない軍用草鞋の特許を申請。〔読売 12/21(3)〕
- ・12/ “新流行を追う粋人佳客の好伴侶『流行報知』” 発刊。毎月3回、東京牛込の流行報知社より。〔刊行物〕流行報知社《流行報知》創刊(12月、月刊)

B 欄<現況>

注）B欄の付属標準画像例は、文字（街並み、未婚女性など）の下にサムネイルの画像を表示。それぞれの画像をクリックすると拡大可能。文字をクリックすると身装画像データベースにリンクする。

風俗標準画像	（街並み）	（未婚女性）	（既婚女性）	（男性）	（子ども）	（美しい人）
--------	-------	--------	--------	------	-------	--------

- ・1/ 新春の市況—京都の三が日中に、“礼者は洋装減じて和服が多くなりたるは何処もおなじきにや”。〔日日 1/5(3)〕
- ・1/ ‘陸軍各隊下士以下の元日の服装を見るに、一外観上齊一を欠くの恨みありて頗る醜し元来服装規則にはそれぞれ規定ありて決して斯くの如き区々の服装を為すを許さず—。’〔日日 1/5(3)〕
- *2/ 大阪婦人の流行衣類。〔都 2/9;10(5)〕
- ・3/ 一時は蝙蝠傘に押されていた和日傘が、とくに地方では復活している。蝙蝠は破れると繕うのがむずかしい、というのが理由。〔都 3/16(2)〕
- ・3/ 流行の根掛 身狂言に因んで、福助好み‘おみわ掛け’、栄三郎好み‘妹背掛け’、団十郎好み‘清正の烏帽子に牡丹’、左団次好み‘衣装葛籠に牡丹’を売り出したところ、なかなかの人気と。〔日日 3/29(4)〕〔都 3/29(3)〕
- *5/ 白茶と薄鼠の流行〔都 5/11(2)〕
- *5/ 団扇の景況〔都 5/22(1)〕

＊5/ 京都呉服の新傾向 [日日 5/26(10)]

＊6/ 夏向婦人の髪飾り [都 6/3(2)]

・7/ 陸軍省、マニラ麻製の軍用草鞋の工夫を重ねる。 [日日 7/15(3)]

・8/ 大阪南地五花街が南京虫で悩まされる。難波新地のある置屋の絨毯から湧いたとの噂。 [大朝 8/12(4)]

・8/ 近頃、雪駄が流行っている。横浜の貿易商人が外国商館に出入りするときに、そのまま床に上がれて都合がよいことからはじまった、とされる。 [東京経済雑誌 8/25]

・9/ 軍需のため、毛布、毛織物の価格暴騰。 [日日 9/14(8)]

＊10/ 日清戦争従軍新聞社特派員の旅装。 [日日 10/13(10)]

・11/ 呉服商、古着商、質商いずれも例年より二三割方の不景気。 [都 11/2(2)]

・12/ “年齢二十四五の女あり、頭には子供用の陸軍士官用の帽を戴き身には当時流行の戦争更紗の筒袖を着して靴を穿きおもちゃのサーベルをさげー” [都 12/9(3)]

＊12/ 流行の下駄類 [日日 12/23(7)]

・12/ 今年景気のよいもの一靴、鞆、洋服。洋服は一昨年来転業した者も、追々復業している。 [都 12/21(1)]

＊12/ 大阪府下の、古着古物商、理髪業・女髪結の景気 [大毎 12/28, 29(6)]

C欄〈回顧〉－「束髪」項を例として

C欄では、『古事類苑』(神宮司庁)の前説にあたるものとして〈内容と名称〉を設け、ここでは信頼できる、あるいはとくに参考とすべき見解を含む、主として事典類を引用する。〈補足〉は文字どおり、編者の補足意見である。なお、本来の年表においては、〈回顧事例〉に対して編者が発言することはないが、本稿では、年表の目的、構成、性格を示すために、一部の情報には注釈のかたちで、参考意見を加えている。

以下、65の主題のうちのひとつである「束髪」を例として、その一部をC欄に示す。なお、コンピュータ上では、この65項目について、別ウインドウを開くシステムを組む予定である。

束髪 【身装概念コード DX000. 6】

〈内容と名称〉

・①髪を束ねて結うこと。また、頭上でたばねた髪の総称で、男女ともに称した。

②明治十八年(1885)以降、女性の間に流行した水油を使った髪の結い方。上げ巻・下げ巻・英吉利巻・マーガレット、また庇髪・耳隠し・二百三高地・七三・オールバック・S巻ナド、その時の流行によっていろいろな名がつけられた。 [小学館「日本語大辞典」2000]

〈補 足〉

・束髪は、当初は外来の髪形という意識がつよかったため、洋髪(西洋髪)とよぶひともあった。たとえば藤沢衛彦は、著書「明治風俗史」(春陽堂、1929)のなかで、洋風束髪、または単に洋髪と呼んでいる。(p. 373)

・末期の草双紙や初期新聞小説のなかで、束ね髪といわれているものは、洗い髪をぞんざいに巻きあげて横櫛や簪で留めておくような、仮の、あるいは手軽なつくね方をさす。初期の束髪指導書では、この種の和髪も、束髪に含めている。

・束髪は先の芝山の解説の通り、スタイルとしては一定したものではなく、人気のスタイルにも変遷があった。その全体の特色は、髪を上げて結ぶという点で日本髪の特徴を受け継ぎ、ただし前髪、鬢、タボ、髷を分けないという点で日本髪と区別される。

油を用いるか、その油がどんな種類か、膨らみをつけるか、そのためになにを使うか、アイロンを使うか—といったことは、長い期間には大きな変化があつて、いちがいにはいえない。1930年代以後は芝山の指摘するように、かつての庇髪のなごりの、鍋蓋のような、アンコで膨らませたスタイルで、主に中年以上の女性の髪型になった。第二次大戦以後には結うひとも稀になったが、1970年代以後でも、老婦人のなかには見かけられた。 [以上、主として『美容画報』；『すがた』；『新美容』；「現代理容大鑑」すがた社 1940、および聴き取り資料にもとづく]

・1920年代以後になると、束髪をハイカラとよぶようになった。さいしょハイカラというのは束髪の一

であったが、やがて混同され、同一化したらしい。文献の上では、1910年代末に、そのことを指摘する例がはじまり、[『婦人画報』1918/9月, p. 31; 鹿児島新聞 1919/1/24(8)] 1920年代半ばにはこの言い方がほぼ定着して、第二次大戦後まで続いている。

〈回顧事例〉

・トンヤレ節の流行は明治三四年(1870, 1871)まで続いて、その間斯くの如くにもうたわれた。‘姉さん姉さんお前の頭にぐるぐる巻いたはなんじゃいな トコトンヤレトンヤレナ これは流行の束髪、いぎりす結びを知らないかトコトンヤレトンヤレナ’と、モガの先祖をうたっている。[添田亜蟬坊・添田知道「流行歌明治大正史」p. 10, 春秋社 1933]

注釈) 西洋風の束髪が存在したというデータのなかでは、飛び抜けて古いものである。ただしこの替え歌が明治3, 4年のものだった、という根拠は、添田父子が存命していない今では、謎である。

・渡辺の束髪会—明治十五六年(1882, 1883)の頃[鹿又松内「束髪」p. 7, 『貴女之友』NO. 37, 1888/12/30, pp. 7-10]

・明治十七八年(1884, 1885)の頃日本婦人の洋装と共に、束髪なるものが上流社会に盛んに行われたるものにて、初めは洋装の時にのみこれを結びたりしが、明治二十年(1887)四月島田三郎、渡辺 鼎、浜田 昇、石川映作等の諸氏相謀りて、婦人束髪会なるもの起こりて、[稲葉小千「日本結髪史」(春陽堂 1918)]

・六年前(1892)、西洋より束髪と称する一種の結髪を伝え、流行一時を極め、(中略) 倫敦ならずして護謨の櫛を挿さむ令嬢あり、巴里ならずして薔薇の簪を戴く貴女ありし。それも束の間の流行廃れたり。[服部喜太郎「日用宝鑑 社会有益秘宝」頁附なし 求光閣 1898]

・最初日本で束髪の流行したのは、明治二十二三(1889, 1890)年頃、鹿鳴館時代と呼ばれていた時代、当時の知識階級婦人達にみられたものでした。それは前髪の毛をぶすりと切って額に下げ、残りの毛を三つ編みなどにしてくるくと巻き、その上に黒毛の網口珊瑚の小粒玉を飾りにつけたものなどをかぶせたものであったそうです。(中略) 第二期は日清戦争(1895-1896)の前後で、前髪を大きく沢山出したのをハイカラと呼び、髷の形も添え毛などして大きくなり高くなって、二百三高地などという名がつけられていました。[都 1925/5/5(9)「婦人髪将来」]

・明治三十七八年(1905-1906)頃に料理店花月の女将が結んだというので花月巻きというのがあった。これは巴に似た結び方である。(中略) 束髪の前髪をとるようになったのは明治三十六(1903)年頃下田式と云って、下田歌子女史によって前髪を高く張り出すことが認められた。それから後三十七(1904)年に川上貞奴が西洋を模倣して前髪と鬢をつきだして結ったのが初めて、庇髪と名づけて流行した。この庇髪は一名ハイカラとも云われたが、今でもときどき散見することがある。束髪にかもじを入れたのは明治二十年(1887)頃に英国のカウントンという婦人が麻布に住んでいて、髪の毛の少ないのを補うために、かもじ屋に頼んでこしらえたのが初めてだということである。[井上康文「大垂髪から断髪まで」p. 271-272, 『女性』(プラトン社)1927/10月, pp. 259-273]

・日露戦(1905-1906)後をひとつの境界線として、つい最近まで束髪が大変流行しておりましたが、(中略) 一時束髪が大流行した反動と、髪が悪くなる恐れがある所からか、最近はまだ日本髪が漸く認められて、だんだんと束髪の勢力を奪いつつあるようで御座います。[森ちえ子「移り行く流行の髪形」p. 47 『婦女界』1915/8月 pp47, 48]

・束髪というものがわが国に結われましてから、彼是四十年、その間に多少の変遷はありましたものの、(中略) 日本髪に恐ろしい変化を与えたというような訳ではなかったのであります。もっとも其のうち割合最近に起こりまして今尚流行しております庇髪の束髪は、在来の日本髪というものに対立して束髪というひとつの結髪振りになっては居りますが、その髪、扱い方、形などから考えて見ると、矢つ張り在来の日本髪

と大して変わったものではありませんが、大正九年(1920)頃から束髪というものが著しく欧風化して、そこに全く新しい束髪というものを日本に起こしたのであります。〔三須 裕『お化粧と髪のかき方』p. 109, アルス 1925〕

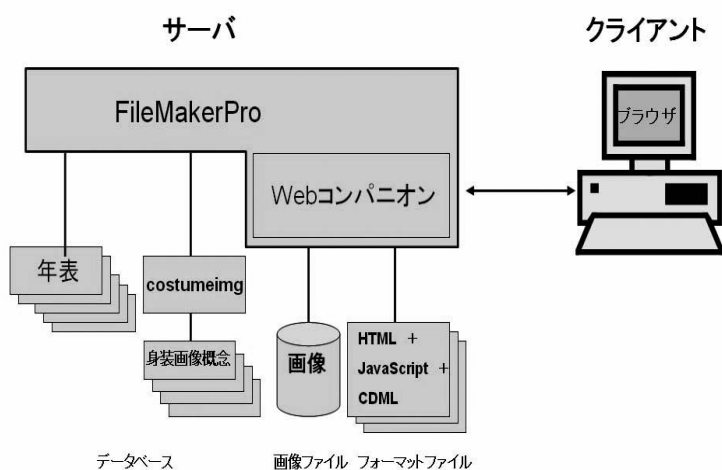
4. システム構成

今回作成したプロトタイプのベースとなったシステムの構成⁷⁾については、既に発表済みであるため、ここでは身装画像データベースの画像概念コードと、年表との連動機能に関連する箇所について簡単に触れるにとどめる。

本データベースのテーブル構成は、既出の通り、costumeimg 表に基本的な情報を蓄えておき、そこに入力されている身装画像概念、撮影部分、グループ解説、画質といったコードについての解説を、それぞれリレーションを張った別の表に蓄える、というものである。costumeimg 表には、FileMaker の特徴や制約を考慮にいれて、基本的な情報以外にいくつかのフィールドを追加し索引の作成を行って、検索時のパフォーマンスの向上やプログラミングの簡素化を図っている(図1)。

また、本システムは、FileMakerPro に装備されている Web コンパニオンのカスタム Web と呼ばれている機能を用いて実現している。カスタム Web は、通常の HTML 文書の中に、CDML というマークアップ言語のタグを埋め込んだ形のファイル(フォーマットファイルと呼ばれている)によって構成され、この CDML タグによって FileMaker のデータベースと連動させて、動的に Web ページを生成することができる。

次に、年表においては、事件、現況、回顧の3つに区分して記述することを提唱しているが、今回作成したプロトタイプでは、実装上の都合から、年、事件、現況、現況画像、回顧という5つの表から構成してみた。年の表から特定の年を指定することによって、事件、現況、現況画像、回顧の各表の該当レコードを表示するという単純な仕組みである。回顧表については、開始年と終了年という項目を持ち、ヒットする範囲に幅を持たせている。身装画像データベースとの連携は、これらの表中の該当箇所に、身装画像データベースへの URI に、特定のレコードへアクセスするためのパラメータを付加したものを挿入することにより実現している。



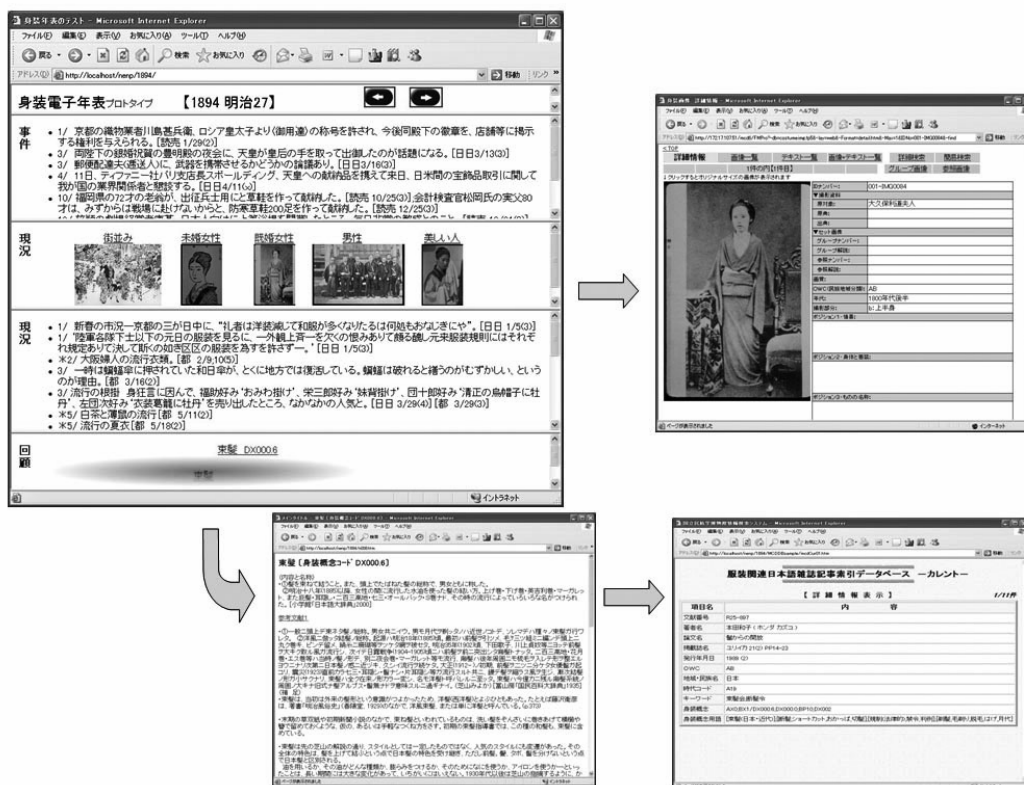
(図1)

図2は、年表データから明治27年の「1894年」を選択した画面である。

現況の欄の画像の3つ目をクリックすると、その右の画面のように身装画像データベースから該当データが表示される。

回顧の欄の中で移動しながら表示されている「束髪」をクリックすると、下中央の画面のように「束髪」についての解説が表示される。

さらに、その中の参考文献へのリンクからは、右下のように、現在すでに公開されている「服装・身装文化データベース」の「服装関連日本語雑誌記事索引データベース」中にある文献の書誌情報を得ることができる。



(図2)

5. 今後の課題

今後の課題は次のとおりである。まずは、身装画像データベースのための画像データを早急に分析・整理し、入力を完了しなければならない。なお、これらの画像データはつねに正確な時日が明らかとは限らないので、電子年表とのリンクには注意と時間が必要である。電子年表については、各年のA、B欄のデータの選択・入力、および必要に応じて原テキストを表示できるようにシステムを組む。また、10数年の幅をもつことが普通である身装の事柄の生起と消滅のあいまいさを視覚的に表す方法を検討する。C欄に関しては、65主題の表示方法について検討する。さらに、幅の広い要求にこたえることのできる身装画像データベースと身装電子年表の実現のために、現在、平行して作成中である身装専門辞書データベースとリンクをはかることを検討する。また、本格的な公開に向けて、サーバシステムへの移行を検討する。

注)

- 1) 高橋晴子 身装画像にみる近代日本の文化変容—データベース化のための基礎研究 (大阪大学大学院文学研究科博士論文 第17464号) (2003)
- 2) 高橋晴子 身装文化画像データベースの作成: 近代日本を対象として 人文科学とコンピュータシンポジウム 論文集 pp. 135-142 (2003)
- 3) 高橋晴子 身装電子年表の作成に関する基本的課題—近代日本身装画像データベースを前提として 大阪樟蔭女子大学 (学芸学部) 論集 No. 41, pp. 161-175 (2004)
- 4) 高橋晴子 身装電子年表の作成に関する基本的課題 2—風俗・流行関連主題 大阪樟蔭女子大学 (学芸学部) 論集 No. 42, pp. 197-212 (2005)
- 5) <服装・身装文化データベース> (<http://www.minpaku.ac.jp>) のデータベース群は次の通り。
 1. 衣服標本画像、2. 服装関連日本語雑誌記事-カレント、3. 服装関連日本語雑誌記事-戦前編、4. 服装関連日本語図書、5. 服装関連外国語民族誌
- 6) 衣料情報レビュー No. 1~No. 48 (1976~2001) 大阪樟蔭女子大学衣料情報室発行
- 7) 高橋晴子、山本浩幾 身装文化画像データベースシステムの構築 アート・ドキュメンテーション研究 No. 11 pp. 15-23 (2004)